



光星 初戦で姿消す

序盤の大量失点響く

▽捕逸 久守（八）
 【評】八学光星は初回、二塁とベンチを招く。右翼線への二塁打と捕逸で3点を先制された。二回は失策や四球で走者を許すと、押し出しと暴投でさらに失点。六回にも2死走者なしから3連打を浴びて追加点を奪われるなど、ミスや詰めぬ甘さから最後まで後手に回った。打線はつながりを欠き12残塁。七回無死一、二塁の好機をつくったものの、中軸3人が簡単に凡退したのが痛かった。

○：八学光星の3、5番の中軸は1安打のみ。好機は一本が出ず、仲井監督は「焦りがあったのか」と肩を落とした。特に象徴的だったのは4点を追う七回無死一、

二塁の場面。打席に立った3番佐藤は「絶対次につなげる」と初球の直球を振り切ったが、一邪飛に抑えられ流れを引き寄せられなかった。後続も凡退し無得点。佐藤は相手投手の球の見極めができず、次につなげられなくて悔しい」と負けた責任を背負い込んだ。来年の春に向け「まずは体づくりを大切にしたい。光星の3番にかざわしい打者になる」と自分に言い聞かせるように語った。



【柴田一八学光星】2回表、柴田に1死満塁と攻められ、主戦横山（中央）のもとに集まる八学光星ナイン＝右巻市民球場

主戦山 乱れた心 流れ手放す

初回いきなり3失点。2年ぶりにのセンバツを目指す八学光星の出はなをくじかれた。「流れを持ってこなければ」。今大会から背番号1を背負う横山は自ら奮い立たせ、二回のマウンドに立った。最速140km/hの直球が武器。先頭打者を追い込み、力のない

焦点
 遊ゴロに打ち取った、はずだった。ところが一塁への送球が大きくそれ、出塁を許してしまう。その後、マウンドでの土の感触に違和感を抱き、制球が定まらなくなった。さらに送りバントの処理を誤り、満塁と傷口を広げた。「緊張とプレッシャーがあった」。乱れた心。動揺は隠

「制球、制球。ベンチから声が飛ぶ中、あえて力勝負にこだわらねば」。3番打者で押し出し、次の4番打者では暴投。言葉とは裏腹に試合の流れを手放した。「周りが見えていなかった。もっと周りを信じて投げれば結果が違っていたはず」と横山。失策、四球、暴投…。仲井監督は「これじゃ草野球」と険しい表情で言った。泥くさく、粘り強く。強豪校のモットーは最後まで影を落とさない。「残りの甲子園出場のチャンスは来年夏の1度だけ。冬に成長するしかない」。失意の2年生エースは、自らへ言い聞かせるように話した。（松田啓志）